

すべての子どもに幸せなスタートを



地域の中で子育ての孤立を解消する 家庭訪問型子育て支援・ホームスタート

支援拡充プログラム開発レポート

(公益財団法人東京都福祉保健財団助成「子供が輝く東京・応援事業」)

特定非営利活動法人ホームスタート・ジャパン 発行

INDEX

- P2 - 5 ホームスタートとは
- P6 - 9 ホームスタートによる多胎家庭への支援
- P10 - 13 ホームスタートによる外国にルーツある家庭への支援
- P14 - 17 ホームスタートによる学齢児家庭への支援にむけて
- P18 - 19 地域でホームスタートを始めるには

すべての子どもに幸せなスタートを！



Home-Start

家庭訪問型子育て支援 ホームスタート



ホームスタートとは、乳幼児がいる家庭に、研修を受けた地域の子育て経験者が、週に1回2時間程度、無償で訪問し、「傾聴」(親の気持ちを受け止めて話を聴くこと)と「協働」(親と一緒に家事や育児、外出などをする事)をする家庭訪問型子育て支援ボランティアです。イギリスで1973年に始まり、世界22ヶ国、日本でも29都道府県110地域(2021年3月現在)にひろがっています。

「届ける支援」で子育ての孤立を防止 ～ 支援の隙間を埋めるホームスタート ～

妊婦さんや小さな子どもを育てる親は、子どもの命を預かって一日も休みがありません。身近に頼れる人もなく、不安な気持ちに押しつぶされそうになったり、ワンオペ育児でイッパイイッパイになって、ストレスが溜まってしまっても少なくありません。イライラする気持ちの行き場がなくなると、傍にいる子どもにあたってしまうたり、家庭内がギスギスと喧嘩が絶えなくなったり、家庭が子どもにとって安心できる場所でなくなる事態につながってゆきます。ホームスタートは、身近に不安や悩みを話せる人がいない親を訪問し、一緒に話をしながらちょっとした家事や育児をして共に過ごし、子育ての孤立感を解消します。

ほとんどの自治体では、以下のような子育て支援施策を打ち出しています。それでも、「既存の支援が利用できない」「支援が届いていない」子育て家庭が多く存在しています。多胎や年子、障がいや病気のある親や子ども、経済的に余裕がない家庭、仕事や介護と育児の両立で余裕がない親、外国人の親など、子育てひろばや相談窓口に出かけてゆくことが困難な家庭は多く存在します。ホームスタートは、こうした支援のすき間で誰かの手助けを必要としている家庭も、誰もが気軽に利用できる訪問型の子育て支援です。

- 地域子育て支援拠点事業に
行きたくても行けない親子・気疲れするなど行きづらい親
- 乳児家庭全戸訪問事業では
継続したケアができない心配な非困難家庭
- 養育支援訪問事業では
対象とならない気がかりな家庭(グレーゾーン)
- ファミリーサポートセンター事業では
対応できない親自身への支援、有料支援が利用できない家庭



「当事者性」と「素人性」を活かした「住民ボランティア」ならではの支援

ホームスタートの特徴は、「当事者性」と「素人性」を活かした住民による訪問型の子育て支援であることです。「ホームビジター」は、子育て経験者の無償ボランティアです。37時間の講座を修了することが必須ですが、活動の意思があれば、誰でも参加することができます。無償ボランティアの強みは、指導やチェックをする人でもなく、仕事でもなく、親戚や友人のように「ただ傍にいる」「ゆったり話を聴く」時を大事にすることができます。同じ親同士の支え合いは、支援する側・支援される側といった関係性とは異なり、親の主体性も高まり、子育ての大変さだけでなく、一緒に喜びや楽しさも分かち合うことができる良さがあります。

「傾聴」と「協働」 ～ 親自身のエンパワメントのために～

ホームビジターは、週に1回2時間、4～6回(2ヶ月程度)家庭を訪問します。ベビーシッターやヘルパーのように親の代わりに家事育児をする人ではなく、親と一緒に家事育児を協働しながら過ごす、伴走型の支援者です。具体的には、以下のような事を一緒にします。利用家庭の状況に応じて、柔軟に対応できる点もボランティアの強みの1つです。

「傾聴」と「協働」は、親自身のエンパワメントにつながります。共感的に寄り添う人がいることで安心感が得られ、孤立感が解消します。話をすることで、自然と自分の気持ちがすっきりしたり、整理されたり、自身の思いに気づくこともあります。また、ひとりでは不安でも、誰かが一緒ならできることもあります。子どものために、自分のために、やってみる、行ってみる、という経験の中で、失いかけていた自信や子育ての意欲を取り戻していくことができます。外出同行を通して、新たな地域資源とつながり、必要な時に必要な援助を得ながら自身で子育てができる力がうまれてゆきます。



ホームスタートの主な支援内容と利用後の変化

主な支援内容

傾聴

受容：話したいこと(不安/悩み)を聴く
共感：気持ちを共有する、頑張りを認める
一緒にいる：傍らにいる、何気ない話
情報提供：地元の話、子育て経験談
簡単な献立メニューなど

協働

家事：一緒に食事やお菓子を作る
外出：一緒にひろば・健診・買い物等に行く
子どもと遊ぶ：室内や公園で一緒に遊ぶ
地域のつながり：地域の事業と一緒に参加
他の支援の利用：窓口と一緒に行く

利用後の変化例

- ・自分の子育てに自信がついて不安が解消した
- ・悩みはあってもそれでもいいと思えるようになった
- ・イライラが減り子どもを怒鳴るのが減った
- ・子育てが楽しいと思えるようになった
- ・子どもを連れてひろばに行けるようになった
- ・ファミサポなど保育を利用できるようになった
- ・子どもの接し方や遊び方を知ることができた
- ・家事育児に頑張り過ぎてた肩の力が抜けた
- ・夫や親に手助けしてほしいと言えるようになった
- ・復職して仕事と育児を両立しようと決心できた
- ・視野がひろがって人と話せるようになった
- ・子どもの問題行動が減少した

住民でも「安心安全」に訪問できるしくみ ～オーガナイザーの役割と体制～

訪問支援は1対1の対人支援であり、深く関わる中で、家庭が様々な悩みや問題を抱えていることが見えてくるケースもあります。ホームスタートには、「当事者性」と「素人性」を活かしながら、安心安全な訪問支援を実現するための様々な工夫がプログラムの中に組み込まれています。

各地域組織には、ホームスタート事業を担う「オーガナイザー」が1～4名おり、訪問支援のマネジメント、ボランティアの養成・サポート、地域連携の役割を担っています。資格は必須ではありませんが、子育て支援の経験が3年以上あることが望まれます。

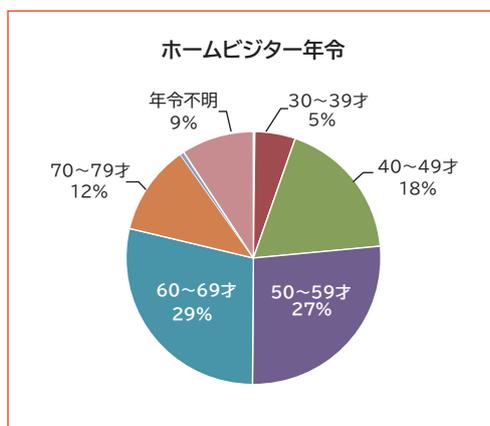
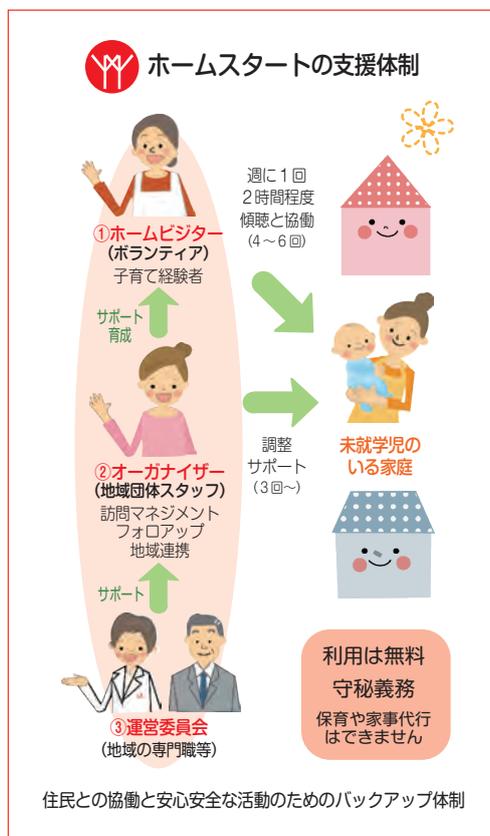
地域には、さらに、オーガナイザーを支える運営委員会を設置し、訪問活動の普及と質の向上をバックサポートしています。

共通カリキュラムのホームビジター養成講座

ホームビジターになるためには、37時間のホームビジター養成講座を受講する必要があります。講座は、全国共通のカリキュラムに基づいて各地域組織が主催します。子育て経験があり、全日程参加することができ、ボランティアとして活動する意思があれば、無料で受講することができます。ボランティアといえども、守秘義務を厳守する必要があり、ホームビジターの役割と限界も理解します。養成講座は、オーガナイザーとホームビジターが信頼関係を構築する大切な機会です。ホームスタートのスピリッツ「フレンドシップ」を大事に、様々な配慮をしています。

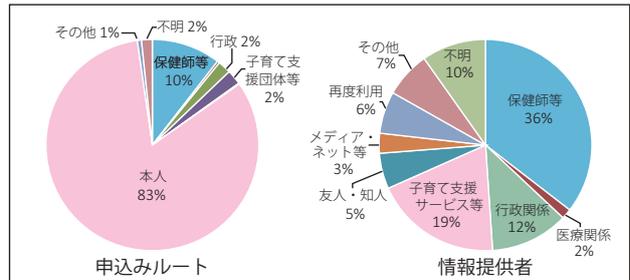
効果の高い「訪問マネジメントの手法」

家庭訪問は、オーガナイザーとホームビジターがペアで担当します。オーガナイザーは、ニーズをアセスメントし、ホームビジターのマッチングやサポートを行い、利用者・ホームビジター双方にとって安心安全な支援となるよう伴走します。多様なニーズに合った支援を提供するために、各ステップで使用する共通の書式ツールがあります。理念や支援原則、活動指針、活動規範を守り、利用者の主体性を大事にしながら、これらのツールを活用することで、一定の支援期間で高いニーズの充足度が得られています。(右ページグラフ参照)



虐待予防と地域ネットワーク

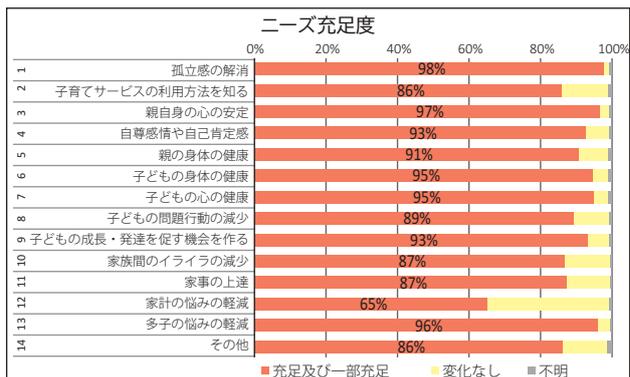
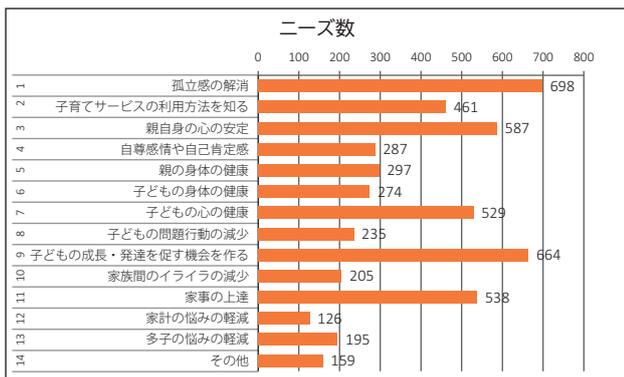
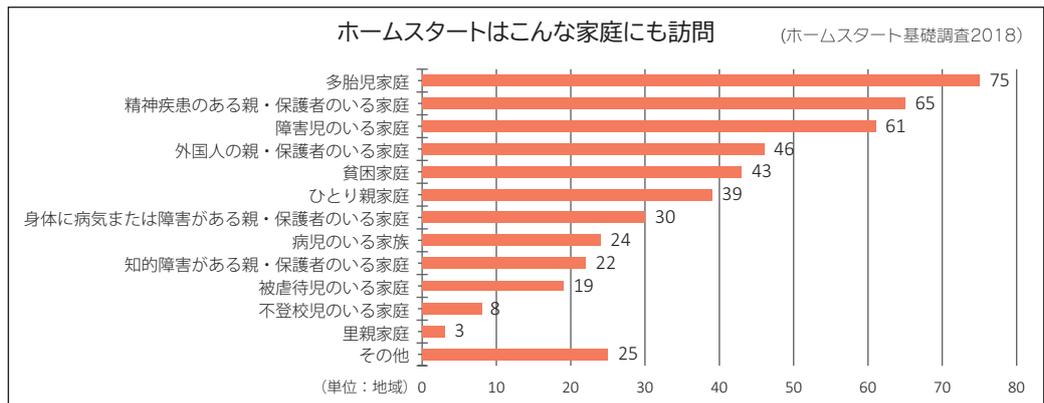
ホームスタートは、地域の力で虐待を予防する活動として、多くの地域で自治体の委託協働事業として位置づけられています。支援の現場では、赤ちゃん訪問や乳幼児健診時に、地域保健師がホームスタートの利用をすすめたり、役割分担をしながら困難家庭を共に支えるなど、様々な協力と連携が進んでいます。具体的にどのように連携することで地域の親子のQOLを共に高められるのか、事例を通して共に学び合う機会も作っています。また、5年前には産前産後支援プログラムを開発し、初産婦の場合でも、産前からの切れ目ない支援としてホームスタートを利用できるようになりました。出産前につながり、産後すぐに訪問できることで、産後うつ予防にもなり、虐待の早期予防にも効果があると期待されています。（現在、全国の約半数の地域で導入）



10年間の訪問実績から見えてきた「利用家庭の多様な背景」

イギリス生まれのホームスタートは、2009年に日本版プログラムとして始まり、約1万7千人の子どもがいる1万家庭に、のべ8万3千回の支援を届けてきました。ニーズの充足度は平均92%と、活動開始以来、高い水準を維持しています。2018年に実施した全国ホームスタート基礎調査では、下記のように多様な家庭を訪問している実態が見えてきました。どのような家庭であっても、ホームスタートでできることは、「傾聴」と「協働」による寄り添う支援ですが、共感的な理解を深めるためには、学びが必要です。

そうした問題意識の中、2018年9月～2021年3月にかけて、（公財）東京都福祉保健財団「子供が輝く東京・応援事業」の支援をいただき、「支援の隙間を埋める家庭訪問型子育て支援拡充プログラム開発事業」に取り組むこととなりました。次ページからは、本事業で取り組んだ、「多胎家庭支援」、「外国にルーツを持つ家庭への支援」、「学齢児家庭支援」を紹介します。



多胎家庭支援プログラムの開発 — 妊娠期からも寄り添えるホームスタートの支援 —

多胎家庭はなぜたいへん？

多胎育児は、妊娠期の母胎のリスクや体調不良から始まります。早産予防のため長期入院になることも多く、仕事の調整、家族の協力等、対応を次々と迫られます。出産後は体力の落ちた母親が小さく生まれた複数の赤ちゃんをお世話することになり、育児期も何事も二人同時に。一人一人に十分に対応できていないのではないかと自分を責める母親もまれではありません。

多胎家庭に必要な「訪問型支援」

このような背景をもつ多胎家庭への訪問支援は、大きな意味があります。まずは「実質的な手助け」が大きな救いになります。日々の育児の困難感や緊張感からも少し解放されますし、そのような状況をよくわかった上で寄り添い受容的に話を聴いてくれる人の存在は、大きな「心の支え」になります。それによって、母親も自分自身を取り戻し、家族全体の風通しが良くなるという好循環が生まれるのです。

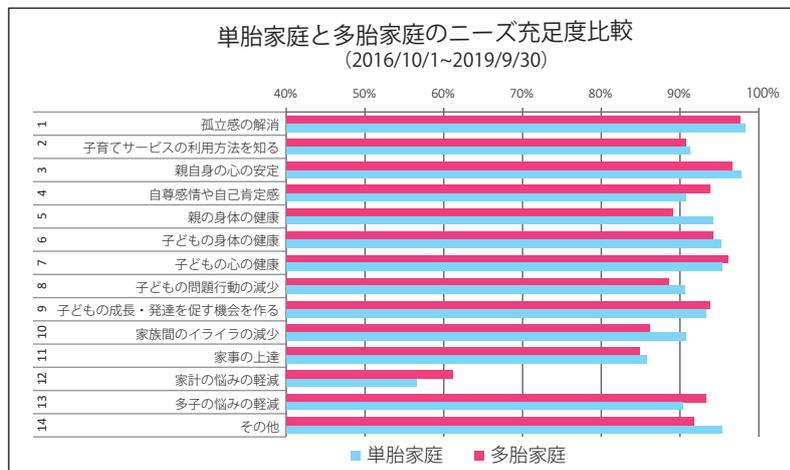
ホームスタートでの多胎家庭の支援の効果

HS-QISS(HS Quality Improvement Supporting System)によると、利用家庭全体の約8%が多胎家庭です。「100出産に1」という多胎家庭の割合から考えると、多胎家庭にとって無料で複数回訪問するホームスタートは、とても利用しやすい支援なのです。また「親自身のニーズの充足度」も高く、ホームビジターが寄り添い応援することによって、親が自分自身を取り戻しエンパワメントがはかられていると言って間違いありません。

プログラム開発の手応えと今後

以上のことを踏まえ本プログラムでは、①多胎家庭の状況を理解すること、②ホームスタートの「傾聴と協働」という支援原則の中でどのような支援ができるかをグループになってそれぞれの立場で話し合う、ということを中心としました。このプログラムに基づいて行った研修会は、いずれも多胎家庭の状況に思いを馳せ理解を深めると共に、お互いの考え方や活動の工夫を知ることによって、ホームスタートの支援の意味について振り返りかけとなりました。今後もスキルアップ研修等に活用することで、多胎家庭だけでなくスペシャル・ニーズをもつ家庭への支援を考える機会になることを期待します。

(HS 多胎家庭支援プログラム開発委員会 委員長 田中輝子・HSJ 理事／(一社)日本多胎支援協会理事)



左記グラフを見ると、単胎家庭よりも多胎家庭の方が充足を感じている項目が多く、多胎家庭にとってホームスタートの支援は単胎家庭よりも効果が高いと言えます。利用者自身が「多胎ならではの悩みだ」と表明しているニーズでも、ホームスタートの仕組みである「一緒に過ごすこと」や「共感・共有・受容」といった支援によって、多胎育児から生じる利用者様々々な気持ちに働きかけた結果ではないでしょうか。

プログラム開発協働パートナーからのメッセージ



今回のプログラム開発は、
日本多胎支援協会の皆さまと一緒に取り組み
ました。多胎育児のエキスパートの皆さんと、
あつ〜く語り合えたのは最高でした。
ありがとうございました！！



一般社団法人日本多胎支援協会 代表理事 / 十文字学園女子大学 教授 布施晴美

多胎家庭支援の中で大切なことは、地域の中で孤立させないことです。多胎家庭は、単胎家庭とは異なる妊娠期の生活を送り、出産後も複数人の赤ちゃんを同時に育てることの難しさと緊張感を持って生活しております。多胎家庭は、頑張ることは当然のこととして孤軍奮闘する中、心身は疲弊しています。産後うつを呈し、虐待寸前に陥っている家庭もあります。この状況を理解し、傍らに寄り添う人の存在が必要です。

貴団体の活動は、多胎家庭の想いの傾聴と、多胎育児の困難感を乗り越える術と一緒にみつけるための協働を軸としています。令和2年度から、国も「産前・産後サポート事業」に多胎家庭支援に特化した事業を加えましたが、貴団体のパートナーシップスタイルの心身への寄り添いの支援も国が目指す事業と一致しております。さらに貴団体の活動により、多胎家庭が困難な状況から1歩踏み出す力をつけていくことを期待しております。

一般社団法人日本多胎支援協会 理事 / 佐藤喜美子

今回、ホームスタートの皆様とご一緒に多胎家庭支援プログラムの開発に関わらせて頂きました。私は、元・助産師で助産学の教育に携わってきました。専門職の目からみても単胎妊婦と多胎妊婦の課題は大きく違います。そこで、ホームスタートに携わって頂いている皆様に、より多胎家庭のことをご理解頂けるように、基礎資料の作成を担当させて頂きました。会議の場では、熱心なホームスタートの皆様から多胎家庭を訪問された時のご様子や、ご意見を伺い、多胎家庭の背景、特にあまり一般的に知られていない妊娠期から続いている様々な不安感や困難感、その理由等を知っていただくことによって、さらに利用者に寄り添うことにつながると感じました。今後も、多胎家庭および多くの子育て家庭の人々が幸せな人生のスタートができるようにホームスタートの皆様の活動を期待しています。

一般社団法人日本多胎支援協会 理事 / NPO 法人ぎふ多胎ネット 理事長 糸井川誠子

子育て支援はチーム戦。特に多胎家庭支援は医療・行政・地域の支援者の方の協力なしにはできません。今回、ホームスタートの方とご一緒する機会をいただいて、地域にこんなにも多胎家庭のことを考えてくださっている人たちがいるんだと心が熱くなりました。

「相手の状態を知ろうとすること、その課題と一緒に向き合い考えること」。これは、支援の基本ですが、ホームスタートの皆さんが、多胎家庭の現状を理解し必要な支援を届けようと、このプログラムに取り組んでくださったことは、大変意義あることだと思います。外出困難な多胎家庭にとって、アウトリーチ型のきめ細かな支援を届けられるホームスタートは、多胎支援の一翼を担うものだと感じています。この支援が全国に広がることを願っています。

INTERVIEW

江東区：ホームスタート・ことう
オーガナイザーさん
お話をききました！

活動を始めたきっかけ

—オーガナイザーになったキッカケは何ですか？

Iさん：10年前、ちょうど子どもたちが落ち着いてきて、そろそろ自分がやりたいことをしたいなと思った頃に、HS（ホームスタート）に出会いました。「これだ!」と思ってホームビジター養成講座に参加して、ビジターとして活動をした後に、オーガナイザーになりました。

Mさん：昔からママ友の愚痴の聴く立場になることが多くて、話を聴くだけでいいんだな、と思うことがよくあったんです。それだけでママに余裕ができて、子どもと向きあえるならいいな、少しでも役に立てたらいいなと思って、HSの説明会に参加しました。ホームビジターとして4年活動した後に、オーガナイザーになりました。

子育ての閉塞感と社会的な閉塞感が重なって

—江東でホームスタートを始めて10年以上ですね。活動は今、どんな状況ですか？

2019年は、年間114家庭でしたが、今年度は新型コロナの影響で少なくなり、約80家庭に訪問しました。最初の緊急事態宣言の頃は、未知の感染症ということで不安が大きく、訪問もお休みにしましたが、夏頃から、利用が徐々に増えてきましたね。

孤立感が深まっている分、誰かと話したい、安心して関わられる人に来てほしい、という人が増えているんだと思います。ママもパパも鬱気味だったり、コロナが生活全般に影響して家庭に不安感が溜まっているのを感じます。実家で出産するはずが、できなくなったという方も多いですし、ひとりで悩んでいると産後うつにもなりやすく、心配です。

子どもにも影響がありますよね。子どもたちも他の大人と接することもないし、子育てひろばも感染予防の観点で人数や時間に制限があり、利用したい時に利

団体プロフィール：NPO 法人ことう親子センター

「江東の子どもたちと子育てのために自分たちの手でできる支援をしよう!」と有志が集まったグループとして平成18年に設立。HS、パパママライン。チャイルドラインが主な事業

用できない話も聞いています。外出の機会が減ることで、子どもたちの成長の機会も減ってしまっている現状があるのかと。親としても、他の人がどんな風子に子育てしているか知る機会も減っています。

利用家庭の1割以上が多胎家庭

—江東での多胎家庭支援はどんな状況ですか？

去年は114家庭のうち18家庭が多胎家庭で、1割を超えています。保健師さんからの紹介が多く、あとは、口コミも多いですね。双子の会でHSの話が出たり、ママ同士が声をかけたりすることも多いようです。双子のママのホームビジターもお一人おられます。

「2人を連れて外出する時にめげちゃう…」

—どんなニーズが多いですか？

今年、0歳での申込みが多いんですが、通常は、1歳頃の申込みが多い気がします。外出同行や公園に遊びに行きたい、予防接種や通院に付き添ってほしいというケースが多いですね。「2人をつれて外出する時にめげちゃう」、「目的地に行く過程に誰かいてほしい」とも言われます。乳児だと沐浴や入浴を一緒にということもありますね。産後、実家から家に戻ってきた時に不安で利用した方もありました。

ママ自身の体が痛い、体がしんどい、ということで、接骨院に同行したこともあります。診察のために、子どもを二人連れて行くと迷惑がかかって申し訳ないと思われがちで、ホームビジターと一緒に行けると、安心して治療が受けられる、と話された方もありました。逆に、子どもが病気で病院に連れていきたいので、というニーズも多いですし、お子さんに障がいがあるご家庭もありました。

最初に一回、誰かと一緒にやってみることから

— 実際、どんなことをしていますか？

不安だらけで、自信がない時でも、誰かに話すだけで違う、と言われる。最初の1回を誰かと一緒にやってみると、「あ、こんな感じか！」とわかるし、次からはママが1人でもできるように、一緒に考えながらやっていく、、、そんな感じでいっしょに過ごしています。「これからは、やれそうな気がする」と思える理由の中には、2ヶ月でも子どもも成長するという点も実際にはあると思いますが、最初は、先々どうなっていくか想像もつかなくて、不安に思う事も多くなりがちです。

傾聴なんて必要ないと最初は思っていたけれど…

— 訪問終了時には、どんな感想がありますか？

利用家庭の中には、「最初、自分には傾聴は必要がないから（HSは）使わないと思っていたけれど、一緒に外出することもできると知って、使ってみた」という方もありました。でも、実際には、いろんなストレスがあって、6回訪問するうちにいろいろと話をすることもあり、「他人に話を聴いてもらえることが、こんなに自分にとっていいことだとは思わなかった」と言われたこともありました。自分の親には心配をかけちゃいけないし、友だちにも言えない、、、そういう

ことって結構あると思うんですが、聞き捨てしてくれる人だから話せて、話すことで自分の気持ちが楽になるということなんだと思います。

「この子はこんなことに興味があるんだね～」と、公園からの帰り道にホームビジターがなに気なく話したことで、「子どものことを気づけて嬉しかった」と言われたり。「ビジターさんが絵本を読んでもくれる時は、いつもと違って、じっと話を聞いているわが子の姿にビックリした」と言われたり。子どもたちにもいいところがあるんだ！と思えることが、ママの励みになるんですね。

ありのままの家庭の状況を支えていきたい

— これからに向けて、ひと言お願いします。

産まれる前でも、後でも、どんな時も、どんな状況でも、そのありのままの家庭の状況を支えていきたいと思っています。HSには、いろんな形で柔軟に対応できる良さもあります。できないこともあるけれど、「できない」というのではなく、「じゃーどうしようか？」「こんなやり方はどうかな？」「こんな支援もあるけど、どうしようか？」と、どんな風にHSでできるのかを一緒に考えています。ママ自身が考えることに寄り添って、そのことをこれからも大事にしたいですね。

利用体験談

紅谷あずさ

ホームスタートは、子ども家庭支援センターでポスターを見かけたのが最初でした。双子が2歳前で、公園に連れていきたいけれど、ひとりで二人を連れていくのは難しい状況でした。危なくて目を離せない時期でしたし、助けてもらえるものがないか、調べていた時でした。2回目は、下の子を妊娠した時で、お腹が大きくなって身体を思うように動かせない時期にお願いしました。

家で子どもたちと過ごしていると、自分が滅入ってしまうというか、そういう部分があったので、ホームビジターさんが来てくれて、2時間話しながら一緒に遊べたことが、とてもありがたかったです。人生の先輩として、お友達とはまた違う感覚で相談できることもあって、いろいろ話を聞くこともできたし、子どもたちもホームビジターさんになついていました。週に1回2時間で6回の訪問

だったけれど、会っていくうちに、私はすぐ打ち解けられました。ひとりで悩んでいることもあったので、人に話を聞いてもらうだけで全然ちがうと感じました。歩きながら話をしたり、家で子どもと一緒に遊びながら、合間にいろんなことを話せました。2時間ずっと話すのだと長いし、事前に何を話そうかと身構えるけれど、一緒に何かしながら話していると、あれも話したいな、これもかな、と、その時々思いついたことを気軽に話せて、その方がいいんだと思います。

最初に電話をかけるのに勇気がいるかもしれませんが、最初の一步をお手伝いしてもらえるし、1人でのより、HSに連絡したら？と言いたいです。



外国にルーツを持つ家庭への支援のために — 共に暮らす、共生のまちづくりへ —

増加する在留外国人

日本に在留している外国人の数は年々増え続け、2019年には約300万人になりました。また、国勢調査などでは見えづらい、親のどちらかが外国籍である「外国にルーツを持つ子どもたち」は、推計約85万人にのぼることが発表されています。国は、外国人労働力の受け入れ拡大の方向性を示しており、今後、さらに多くの多様なルーツの人々と共に、地域で暮らしてゆくこととなります。こうした子どもやその家庭は、文化や習慣の違いや言葉などの壁により、家事や育児などの生活上の困難に直面することが少なくありません。

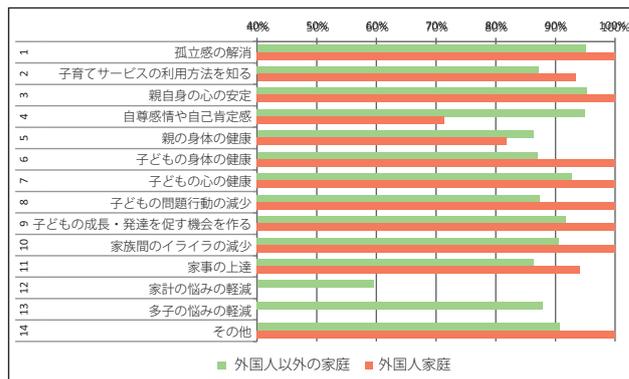
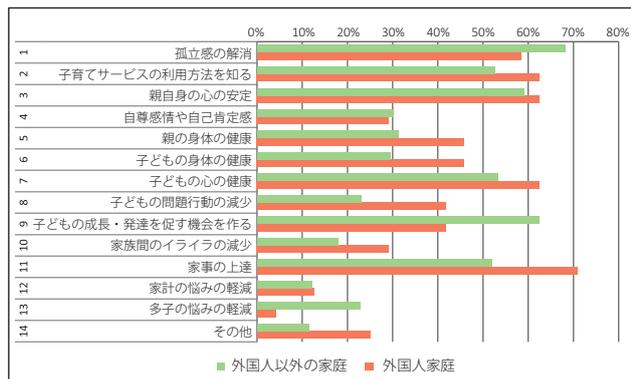
ホームスタートの外国人支援の現状 — 子育てや外出への不安と情報不足 —

2018年のホームスタート基礎調査によると、全国の46%の地域スキームで、外国人の子育て家庭への訪問支援を実施していました。そのうち24地域での活動状況を伺うと、乳幼児健診や通院、子育てひろばの利用や日常的な買物など、外出同行のニーズ割合が高いという特徴はありますが、「子どもと一緒に遊んでほしい」、「離乳食の作り方や沐浴の仕方がわからない」、「子育てサービスの情報を知りたい」といったニーズは、同様に多いこともわかりました。出身国は、中国・ベトナム・フィリピン・韓国・バングラディッシュ・ネパール・ガーナ・スリランカ・タイ・台湾・ペルー・他、と20ヶ国以上に渡っています。利用に至る経緯としては、保健師・行政窓口など自治体関係が64%を占めており、従来以上に行政との連携がポイントとなっていることも見えてきました。また、都内のHS利用家庭のニーズと充足度を外国人家庭と外国人以外の家庭で比較したところ、外国人家庭の充足度の方が高い結果となりました。（下記グラフ）

言葉や文化の違いを超えて寄り添うために — ホームスタートの理念・支援原則をベースに —

本事業では、支援者向けの研修と教材・やさしい日本語教材・利用者向けの多言語ツールを開発しました。外国にルーツを持つ家庭への支援では、言語や文化が異なるため、工夫や配慮が必要となります。つい、外国語が話せないから無理！と思いがちですが、ノンバーバル（非言語）で伝わる事も多く、相手の立場で考えてやさしい日本語を使うなど、根気強く表現の工夫をすれば、意外と通じることもわかりました。HSは、イギリス生まれのプログラムですが、現在世界22ヶ国で取り組まれており、文化や宗教が異なる国々でも、同じ理念と支援原則・スピリットを共有しています。その中では、自分の価値観を押し付けず相手を尊重すること、批判的ではなく寄り添うこと、無差別・機会平等を守ることなどが、謳われています。これらはいずれも、外国人支援においてもとても大切な姿勢であることを再認識しました。外国人ホームビジターのお話を伺う機会もあり、お互いに支え合えるHSの活動が、多文化共生のまちづくりにつながっていく希望も感じることができました。

（プログラム開発委員会委員 山田幸恵・HSJ 理事／HSW 理事）



プログラム開発協働パートナーからのメッセージ



双还没习惯日本
的文化和习俗，
感到不安

Không thể đưa con
ra ngoài được, có
xu hướng tự giam
mình trong nhà



日本福祉大学 教授 石河久美子

日本人と外国人による国際結婚だけでなく、ブラジル人同士が日本で知り合い結婚するなど外国にルーツを持つ家庭は多様化しています。その多くが日本に長期滞在、定住化していきます。地域の生活者もはや日本人だけではありません。多様な文化的背景を持つ人たちも視野に入れた多文化共生のまちづくりが必要です。

自分が生まれ育った国と異なる国に移り住み、生活すると、言葉の問題、文化・価値・習慣の違いなど様々な困難に遭遇することになります。日本と自分の国では、子育てのやり方や考え方が異なる、必要な行政手続きの仕方がわからないといったことが起きて、相談できる相手に恵まれず、孤立しがちです。

このような状況にある外国にルーツを持つ子育て家庭に、家庭訪問という直接的な支援を行い、寄り添うホームスタートの活動は大変意義のあるものです。コロナ禍の制約もあると思いますが、ますますの活動の発展を期待しています。

公益財団法人かながわ国際交流財団 福田久美子

外国にルーツがある方々が、日本で子育てをすることは珍しくなくなってきました。そうした方々は、子育て支援をされている皆様が普段関わるものとは異なる文化や習慣のなかで暮らし、日本語以外の言語を使っていることがあります。

支援者の皆様におかれましては、そうしたご家庭とのかかわりも増えていると思います。言語や文化の違いに戸惑いを感じ、なかなかうまく支援できない場合もあるでしょう。

かながわ国際交流財団では、そのような状況を改善するため、「外国人住民子育て支援事業」において多言語による資料を作成し、神奈川県をはじめ全国の支援者の皆様にむけてウェブサイトに掲載しています。

またプログラム開発委員として、プログラム開発を通じて、多言語資料や支援の際のヒントを紹介させていただきました。ぜひ今後、参考にしながら、外国にルーツがある子育て家庭に寄り添っていただけましたら大変嬉しく思います。

新宿区牛込保健センター 保健師 佐藤和央

新宿区には2020年1月現在約4万2千人の外国の方が暮らしており、住民の約12%が外国人です。東京23区の中で、最も外国人住民の人口数も多く割合も高い区です。例えば、他の自治体で実施するネパール語の母親学級に、是非参加してもらいたいな、と思っても、妊婦さん一人では交通機関を利用することができず、日本語がわかるパートナーは仕事のため同行が難しく、参加できないことがありました。そんな時、付き添って不安を取り除いてくださるのがホームスタートの良さだと思います。

外国人の支援というと、私たち保健師も身構えてしまうことがありますが、同じ地域で生きていることは共通（住んでいる、働いている、支援している）。いろいろな違いがあっても、お互いに関心を持って尊重しあえるならば、良い出会いになると信じています。ホームスタートが、手の届かない人々に支援を届ける大事な役割を担ってくださっています。

INTERVIEW

新宿区：ホームスタート・二葉
オーガナイザーさん
お話をききました！

団体プロフィール：社会福祉法人二葉保育園

明治33年に二葉幼稚園として開園し、現在では、保育園、乳児院、児童養護施設、自立援助ホームを運営。里親支援の都の委託事業では現在特別区17区での活動を行っています。

活動状況について

去年は102家庭訪問し、今年は1月末時点で26家庭でした。今年度は、特に、第二子が生まれた家庭が多かったですね。コロナで外に出られない、サークルもないということで、2、3人の子どもを家の中でずっと育てているのが大変という状況が目立ちました。生まれてすぐの利用も多く、実家からの手助けが得られない方のSOSも多かったです。

外国にルーツを持つ家庭への訪問件数は累計で31家庭で、アジア・ヨーロッパ・アフリカの14ヶ国の方です。保健師・助産師からの紹介がほとんどで、子ども家庭支援センターからの紹介や、区役所の手続き窓口で教えてもらったという方もいました。

言葉の違いはどんな風に対応していますか？

日本語は、カタコトで話される方や流暢な方と様々ですが、読み書きはできないけれど、やさしい日本語を使って、会って話をすれば通じる方がほとんどですね。英語がわからない方も多いです。全く話せない方でも、スマホアプリを駆使して乗り越えてきましたし、敢えて子どものためにも、日本語を話してみたいという方もおられました。

ホームビジターさんも外国にルーツを持つ方もおられますし、海外で子育てをしたことがある方も数名おられます。でも、海外経験のない方にもお願いしてきました。困ったら何でも言ってね！という気持ちで行って頂きました。

どんなニーズがありましたか？

日本の生活に不安を持っておられる方が多いですね。子育てグッズをどうやって選べばいいかわからない、店員さんに話すのも不安、食材を選ぶのが心配で離乳食の作り方がわからないなど、ちょっと教えてほしい、一緒にいてくれると安心という事があります。

あとは、一緒に買い物に行くことが多かったですね。お弁当の事で「変なものを作ってしまった、幼稚園で子どもがいじめられないか心配」と相談されたこともありました。わからないことを一杯抱えていて、「こんな書類が届いているけど、これなんですか？」ということもあるし、次から次へとわからないことを教えて欲しいと言われることもあります。HSの訪問はずっとじゃないので、最終的には、困った時にどこに連絡すればいいかなど、子育てひろばなどにつながれるよう、寄り添えたらと思っています。

訪問が終わる時はどんな感じですか？

「心細い時に来てくれただけで嬉しかった」と最初に言われますね。「HSって、私と子どものためのサポートなんですね」と言われたことも印象に残っています。「私もホームビジターになりたい」という方もおられて、嬉しかったです。

コロナの影響で生活が困窮して、国にも帰れず日本にいる方もおられます。HSが無料ということは、最初の窓口として役立てたのかなと思う時があります。

初めての子育てが大変なのは、国籍に関わらず同じですし、言葉じゃなくて、寄り添う気持ちが大事で、そうすれば言葉を超えられると思っています。お互いに笑顔でいれば、伝わることはあると感じました。ホームビジターがそこにいてくれることが、お母さんにとっては安心で、これからやっといこうという力になったと感じます。身振りだったり、絵に描いたり、本を見せてみたり、あきらめないで、お互いに知っている単語をいろいろと出していくうちに、「これだね！」というものが見つかったりします。お互いに楽しい発見にもなっていくようです。ホームビジターさんから、「私の第二の日本のお母さん、と言われて嬉しいわ〜。」と言われたこともあって、HSらしいなと感じることもたくさんありますね。

私にとってのホームスタート

モロッコ出身 ハジャールさん



妊娠中は（産院で）友達もいましたが、産後はお互い子育てで大変で会えず、孤立状態でした。誰かそばにいてサポートしてほしい、毎日の生活の中で起きる大変さを相談できる人がほしいと感じていました。例えば、病院を見つけるのが大変だったり、日本語がわからないので、日常のごく普通のことをするにも手助けが必要でした。ベビーベッドを探すのも大変で、宅急便を送るのもすごく苦労していました。

ホームビジターのアキコさんが、外国人用の手続き書類のことや、子どもの離乳食のことなど、二葉センターで本を借りてきてくれて、一緒に固形食の食べさせ方を確認しました。毎回とても楽しみで、一緒に料理したり、みそ汁の作り方を教わったり。「作ってみたいな」と話したら「やってみようか？ 買いに行く？」となって、一緒に必要な材料を買ってうちに帰って一緒に作りました。気に入って、それから自分でも味噌汁をよく作っています。一緒にファミリーサポートの登録もしました。一緒に登録手続きをしてとても助かりました。彼女がいてくれるだけで、いい時間が過ごせたとし、彼女にモロッコの料理を作りたいと思って、来られた時に作りました。隣で彼女が見ながら料理をして楽しかったです。最初、「疲れない？大丈夫？」と言われたんですが、料理は好きだし、私が一緒に

に作りたかったんです。説明しながら作るのも初めてで楽しくて。アキコさんのおかげで、日本の暮らし方を知るよい機会が持てました。今では、買い物1つとっても、楽に感じるようになりましたし、以前ほど、難しいとか、複雑だという苦手意識がなくなりました。彼女と経験したことを思い出しながら、欲しい物を探すことも楽しめるようになりました。食べ物のことなど、新しいことにチャレンジする楽しさも知りましたし、日本のサービスを利用することも、最初は怖くて使う気になれずにいたんですが、ちゃんと情報を得れば大丈夫なんだということも気づくことができました。

世界の異なる地で育った女性として、日本にやって来て、そして同時に母親になって、途方もない体験をして、子育ては簡単じゃなく本当に難しくて、、、モロッコ人の女性である私が、日本の女性で実際に子育てをしてきた人とこれほど親しくなれるなんて！母親であるということは、世界中の女性をつなぐ感覚なんですね。アキコさんは私にとって日本と外国人コミュニティの懸け橋のような存在でした。

台湾出身 郭さん



保健師さんからホームスタートを勧められました。半月くらい利用するかどうか考えたけど、知り合いもいないし、場所もわからないし、助けてくれる人もいないし、自分の体調も悪くて不安で、ホームスタートに電話しました。その頃、車が未だなくて、ビジターさんと一緒にバスに乗って子育てひろばに行きました。自分だけだとバスはなかなか利用できなかったのですが、外出もできるようになって、とても助かりました。あとは、一緒に買い物に行って、里芋で離乳食を作りました。里芋は台湾では見たことがなかったんです。子どもの体にいい食事を作りたいと思っていたので、一緒に安心できました。

3年後に2人目が生まれた時に、子どもが二人になったらすごく大変で、また来てもらいました。台湾だと、出産後1ヶ月は実家で休むか産後の宿泊施設に滞在するのが普通なんです。看護師さんも24時間一緒に体調が悪い時は子どもを看てくれるし、

食事のサービスもあるので、ゆっくり体を休めることができるんです。次女は日本で出産したので、慣れなくてすごく大変でした。パパは仕事で忙しいし、2人目だったけど、子育てがとても不安でした。産後、眼の調子が悪くて、眼科の通院に付き添ってもらいました。それから、一緒に料理をしたり、いろんな話をしました。上の子と下の子と同時に泣いた時にどうしようって思うこともあったし、2人の子どもを育てる自信がもてなくて、そんな相談もして、子育ての自信が持てるようになりました。自分でも大丈夫かなと思えるようになって2人目を産んでよかったと思えるようになりました。上の娘がもう少し大きくなったら、「お母さんからあなたへの一番のプレゼントは妹だよ。」と言いたいです。

学齡児家庭支援プログラムの開発 — 暫定ガイドラインの作成 —

ホームスタート（HS）による学齡児家庭支援のこれまで — 年齢による切れ目 —

日本では2009年からホームスタートの実践が開始され、厚生労働省の地域子育て支援拠点の加算事業や、利用者支援事業、育児支援家庭訪問事業などでも活用されてきています。また、ホームスタートの実践方法は、文部科学省の訪問型家庭教育支援事業（学齡児家庭への訪問支援が主に取り組みられている事業）の実践でも参考*にされています。これまでも、乳幼児だけでなく、年齢が上のきょうだい（学齡児）のいる家庭での支援も取り組んでおり、効果も認められています。しかしながら、ホームスタートで支援していた家庭の乳幼児が成長し、学齡児だけの家庭になった途端に、支援が終了するという不都合が生じていました。年齢による支援の切れ目があったのです。

* 文部科学省委託調査『家庭教育の総合的推進に関する調査研究』平成28年3月

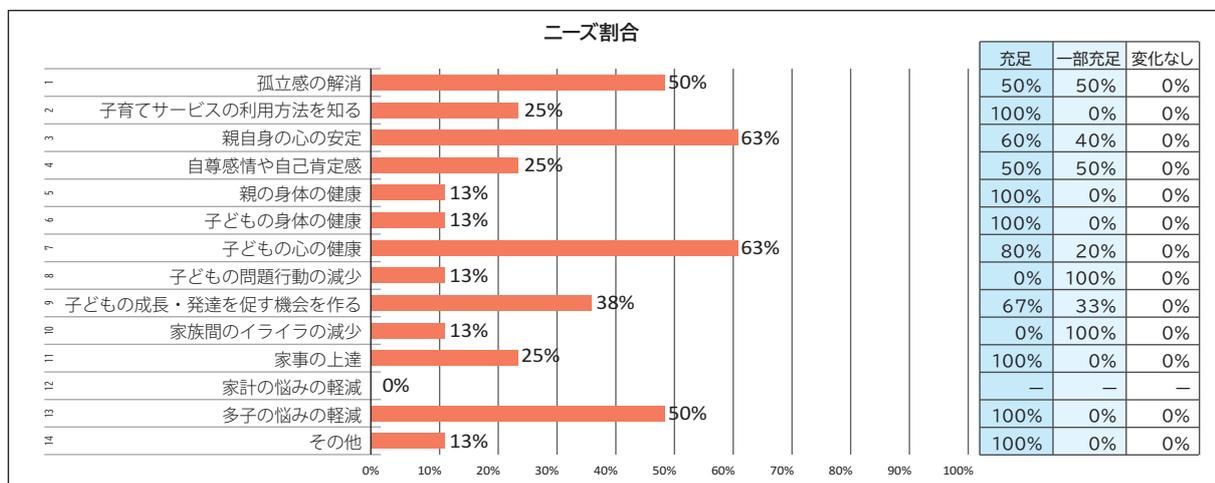
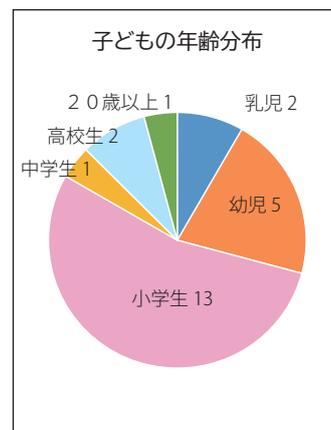
学齡児家庭支援のための暫定ガイドラインの開発

こうしたことから、学齡児家庭への支援をより安心・安全で効果的にするため、そして切れ目のない支援を進めるために、ホームスタートの支援原則に基づいた新たな手順書（ガイドライン）を開発・作成することとしました。2019年秋に学齡児家庭への訪問支援プログラム開発委員会を組織し、試行事業（アクションリサーチ）の実施により検討を進めてきました。地域としては、東京都清瀬市をモデル地域に選び、清瀬市役所、清瀬市教育委員会、ホームスタート・ピッコロ、そしてホームスタート・ジャパンの4者で試験的に実践に取り組み、分析・整理を重ねて2020年度「暫定版ガイドライン」としてまとめました。

モデル地域での試験的な取り組み — 多子家庭の利用が多い傾向に —

清瀬市での学齡児家庭への訪問支援は、新型コロナの影響を受けて8家庭となっています。訪問家庭のニーズとしては、乳幼児家庭の傾向に類似しており、「孤立感の解消」「子どもの成長・発達を促す機会を作る」「親自身の心の安定」「子どもの心の健康」などが半数以上の家庭の利用理由となるニーズとなっていました。また、子どもの数は、1家庭以外は全て3人から4人と多い傾向が見られました。

今後は、2021年度に清瀬市以外の地域にも広げて試行訪問を継続し、暫定ガイドラインをブラッシュアップし、2022年度からは全国で活用できるプログラムとして提供していく予定です。（プログラム開発委員会委員・HSJ 共同代表 西郷泰之）



プログラム開発協働パートナーからのメッセージ

「学齢期の保護者支援の必要性和HSへの期待」

日本社会事業大学客員准教授・清瀬市教育委員 / 学齢児家庭支援プログラム開発委員会 委員長 土屋佳子

東日本大震災後の福島県で、スクールソーシャルワーカー（SSW）として支援活動を行っていた頃、白河市のHSの活動を知りました。被災してもなお子育て支援を地道に続けているHSの皆様の姿に、多くのことを教えられました。「地域の力で子育ての孤立を解消する」というHSの基本理念は、SSWとして出会う学齢期の子ども・保護者にも広く当てはまるものと思い、その必要性を当時から強く感じていましたので、今回のプロジェクトの意義は深いと考えています。

学齢期になると、子どもたちはより多くの他者と出会い、学びあうこととなります。保護者にとっては手が離れていくことを実感する一方で、自我の芽生えなど、子どもの発達段階に応じてしっかり対応しなくては、というプレッシャーも生まれてくるころだと思えます。子どもの成長の折々で、子育ての先輩に話を聞いてもらうことは、そうしたプレッシャーを和らげ、漠然とした不安や緊張を解きほぐすことになるでしょう。HSには傾聴をはじめ、子育て支援に関する知見が蓄積されており、学齢期の保護者支援にも援用できると期待しています。

なお、今般のコロナ禍により、本プログラム開発は計画の変更を余儀なくされましたが、感染対策を講じながら試行してくださったHSピッコロの皆様のご尽力もあり、体験家庭の方々の貴重なご意見・ご感想を聴くことが叶いました。関係各位に感謝しつつ、今後も引き続きプログラム開発に励みたいと思います。そして、この取り組みが、各地域に広がることを願っています。



「1%の奇跡」 清瀬市教育長 坂田 篤

問題です。「子供が6歳になるまで毎週日曜日を一緒に過ごしたとして、それが親の人生の何%に当たるでしょう?」。答えはたったの1%。日曜日は一年間で約50回。6年間では約300回。一方人の一生は約3万日。割り返してみるとたった1%。親子として一番濃密に過ごせるのは、人生の中でほんの数年間。期間限定の奇跡のようなものなのです。

コロナ禍で世の中にイライラが充満しています。休校になろうものなら、言うことを聞かない子供、ガミガミとしつこい親と家庭で毎日顔を合わせることになる。互いにストレスフルになり疲れ切ってしまうことは当たり前。

しかしそんな時こそ、この「問い」を親子で共有してほしい。そして我が子がこの世に生を受けた喜びと、今日まで自分を育ててくれた感謝の想いを、互いが心に宿してほしい。

「コロナは、私たちに『1%の奇跡』を少しだけ余計にプレゼントしてくれたのかもしれない…。ホームスタートプロジェクトは、必ずや多くの親子がこのことに気づくお手伝いをしてくださることでしょう。

「ホームスタート・学齢児家庭支援について」 清瀬市子ども家庭支援センター長 北平宜之

ホームスタートの一番の特徴は、「一般の市民」がホームビジターとして傾聴と協働を基本とした信頼関係に基づく支援方法という点です。

近年では核家族化が進み、両親も遠方や高齢等で、子育ての不安や悩みがあってもすぐに相談ができない時代になっています。このことからより、孤立感や育児ストレスが増し、虐待に至るケースも見受けられます。

こうした点でホームスタートは、子育て経験のある先輩ママが多くホームビジターとして登録しており、乳幼児期の支援にとどまらず、継続支援を行うことで、子どもとの接し方や距離感が難しくなる等学齢期特有の悩みも軽減し、親子ともに安定した状態で生活できることが期待されます。

最後に、当事業が必要とされる方に1人でも多く届けられることを期待するとともに、貴会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

INTERVIEW

清瀬市：ホームスタート・ピッコロ
オーガナイザーさん
お話をききました！

活動状況について

現在、30代～80代の70名のホームビジターさんと一緒に活動しています。ホームスタート（HS）以外にもいろんな支援活動されている方も多いんですが、最近では、HSが初めてという方も増えてきました。

清瀬市は年間出生数が500人弱で、去年は66家庭に訪問しました。保健師さんが、赤ちゃん訪問時に、チラシを使って積極的にHSの説明をすることで、利用に繋がっています。子ども家庭支援センターとの連携も多く、養育支援訪問と併せて家庭を支援するケースもあります。HSは、誰でも気軽に利用できるため、気持ちの面でも利用のハードルが低く、最初の一步になることも多いようです。

毎年、春先は利用が多い時期なんですが、今年は、コロナの影響で減り、2月までで33家庭でした。6月に公共施設の利用ができるようになった時期から、HSの利用も増え始めました。「ずっと我慢していたけれど、もう限界！」という感じなのかと思います。外に行けないし、行っても他の親子との交流がとりづらしいし、公園に行ってもそれぞれ離れて別に遊んでいる感じだし…。そんな中で、孤独を感じる人が増えていると思います。夫のリモートワークの関係でストレスが溜まっても、施設に行くのは心配という方も多い気がします。問合せの時に、「こんな状況なのに、うちに来てもらえますか？」と話される方も多くて、「だいじょうぶですよ」と伝えると、ほっとされる感触があります。

今回の試行を始める前に、学齡児家庭への支援のニーズについて、どう感じておられましたか？

乳幼児の時にHSを利用して、「子どもが小学校にあがるのが心配」という方や、「子どもが多動気味で学校に入ってからが不安」と話す方もおられました。乳幼児の親にとって、学校は未知の世界と感じている

団体プロフィール：NPO法人子育てネットワーク・ピッコロ
「預かる理由を問わない」「困ったときはすぐ手を差し伸べる」をモットーに、住民参加型の24時間対応訪問サービスを実施。子どもから高齢者まで、家族まるごと支援を目指している。

ことも背景にあると思います。今までも、不登校の小中学生のお子さんがある家庭にも訪問していましたが、お母さんの悩みを聴く事も実際ありました。今までは、そういう家庭に入ることは難しい、と感じていたんですが、今回の試行事業では、日本社会事業大学の土屋先生の助言も得られることもあり、やってみよう！ということになりました。

必要な人はいる！という確信があったことが大きいですね。養育支援を受けている人でも、HSでは、「一緒に自分でできることがあればやってみたい」という思いを大事にできるし、あったかい感じで訪問できると、家庭にとっていいこともあるので。

ホームビジターの学齡児家庭支援講座を初試行しましたが、参加の感想は？

講座では、児童虐待や貧困、不登校やいじめ、発達障害など、子ども・若者を取り巻く課題について学び、学齡期の子どもたちの理解を深めました。HSは子どもの最善の利益のための活動ですが、子どもの人権を護りながらHSのできることを改めて学べた点もよかったです。

オーガナイザーとしても、学校関係や教育機関については、まだまだ知らないこともたくさんあると、改めて気づくことができました。学校の先生が家庭に入らなくなっているので、連携の可能性があると感じます。講師の土屋先生は、清瀬市でスクールソーシャルワーカーや教育委員会と協働されていたので、心強く思っています。

参加したホームビジターからも、「『いるだけ支援』という、傍にいてだけで意味があるというお話をきいて、ホッとしました」「HSは専門的な支援ではなく、生活の場で関りをもっていくことの大切さを再認識できました」という感想があり、学齡児支援だけでなく、HSの基本に通じる学びもたくさんありました。

学齡児家庭への訪問はどうか？

まずは、以前 HS を利用した方で、お子さんが小学生になっているご家庭に案内チラシを送りました。教育委員会のご協力もあり、校長会で HS について説明する機会をいただいたり、チラシも全校で配布できました。直接こちらに問合せをされて来た方や、子ども家庭支援センターで紹介された方など、8 家庭に訪問しました。

「親戚両親もいなくて、自分のことを話せる人がいない、話がしたい」という方とは、一緒に買い物をして料理をしたり、子どもたちが帰ってくる前に話をしました。最後の訪問では、「お母さんのように話せたことが、すごくよかった」と話されていました。その他に、「子ども同士の喧嘩が激しくて、学校やセンターに相談しても解決できなかったけど、第三者の人が家にいることで、子どもたちが安定した。一番辛い週の真ん中に来てもらえて、救われた」と話された方もありました。コロナ禍で、子どもたちが家にずっといる時期に、「イライラが止まらない」と利用された方もあります。ホームビジターが家庭に入ること、クッションになったり、イライラせず、ホッとできる時間が持てたんだと思います。ひとりでも、できるにはできるけれど、他人がいてくれるということは、気持ちに余裕ができるということもあります。

従来のホームスタートとの違いはありましたか？

学齡児の家庭は、親としての歴史もあって、私たちはそこに入っていきことになります。今まで頑張ってきたことに対して口を出さずに、ありのままを受け止



都内のホームスタートの仲間が清瀬に集合 (2016 年)

めて共感することが、今まで以上に大事だと感じました。乳幼児期は、親になりたての方が多くいんですが、学齡期になると、公園も子どもだけで行けるし、親の集まりも決まったお付き合いになりがちです。親同士の新しいつきあいを作るのも難しいですよ。

訪問中は、子どもが中心になる時間帯も多いし、年齢によって遊びが違ったり、時には体力がいる場合もありました。でも、親自身が「自分の気持ちをわかってもらいたい」と求めている点も、傾聴によって親の気持ちが楽になったり、悩み事が軽く感じられるようになる点も基本の HS と同じですね。

これからに向けて

コロナ禍ですが、もっと気軽に利用してもらえようように周知をして、支援を届けたいと思います。オーガナイザーとして配慮すべき点について、もっと学びたいと思いますし、子どもの立場に立つことや尊重することについても、さらに学んでいきたいと思っています。今回の試行でご協力いただいた子ども家庭支援センターの関心もとても高いと感じていますし、HS を利用してみたいという方々の力になれば嬉しいです。

学齡児家庭支援の活動内容や感想

話をする	さり気なく私の話を聞いたり、子どもたちの話を聴いてくれた。	子どもの事やたわいもない話、愚痴をじっくり聴いてくれた。
	経験を話してくれ、自分だけではないと思え、少しほっとした。	今困っていることを話すことで、問題が解決し、気持ちが楽になった。
一緒にいる	親子のそばにいてくれた。	子どもと1対1ではなく、大人がいてくれることで安心感が持てた。
	食事の支度の大変さなど、気持ちをわかってもらえていると感じた。	来てくれる週はなんとかがんばれると思えた。
他の支援の利用	他の支援も使えるようになった。	いろんなサポートがあることをまとめて教えてもらうことができた。
子育て経験・情報	男児の子育てについて話せて参考になった。	スマホとの付き合い方についてどうしているか教えてもらった。
親子の関係づくり	子どもと親との関係を作るきっかけになった。	子どもが求めていたことに応えてあげられなかったので、大変助かった。
子どもの遊び成長の機会づくり	一緒に公園などにお散歩に行った。子どもも喜んでた。	子どもがイキイキと遊んでくれたことがうれしかった。
	子どものしたいことを受け入れて一緒に遊んでくれて良かった。	公園に行き、ボール遊びや、川沿いを散歩した。十分身体を動かした。
子どものストレス発散	ひとりひとりの子どもの興味を察知して、話しかけてくれた	他人が入ることで、子ども同士のケンカが減った。
	親以外の人と話したり一緒に過ごし、子どももストレス発散できた	ビジターさんが一緒に遊んでくれて、とてもリフレッシュできたと思う。
家事	一緒に洗濯物をたたんだり、子どもの世話をしてもらいとても助かった。	家事が進んで、時間も気持ちの余裕もできた。



地域で、ホームスタートの訪問型子育て支援を始めるには

私たちは、ホームスタートのノウハウがより多くの地域で活用されることで、だれでも気軽に子育ての手助けが得られる「子育てを支え合うまちづくり」が全国に広がることを目指しています。

誰もが安心して利用することができ、同時に、「私でも役に立てるのであれば…」と思う人たちが安心して訪問ボランティアとして活動できるようにするには、そのための体制づくりがとても大切になります。ホームスタート・ジャパン (HSJ) では、準備に必要な各種情報提供やサポートを行っています。立ち上げまでの流れは、概ね以下のようになっています。詳しくは、事務局までお気軽にお問合せください。(毎月、立上げについてのオンラインサロンを開催しています。ホームページをご覧ください。)

1 地域のニーズ把握・ホームスタートの理解

まずは、関係者の皆さんで、地域の支援ニーズについて話し合うところから始まります。この時点で、ホームスタートについての理解を団体内関係者や連携機関などと共有することも大切です。その中で、団体がない場合、子育て支援に関わる有志が集まり、団体の立上げ準備をすることもあります。(オンライン面談や講師派遣も可能ですので、必要な際は事務局までご連絡ください。)

2 事業計画づくり

団体内でホームスタートを始める合意が確認されたら、具体的な計画作りに入ります。誰がオーガナイザーになるのか？いつホームビジターを養成するか？予算は？など、計画を立てます。オーガナイザーには3年以上の子育て支援経験が必要です。また、お互いに相談しながら業務が進められるように、2人以上の複数体制が望ましいでしょう。(オンライン面談などぜひ活用下さい。)

3 オーガナイザー養成研修への参加

およその計画が立った時点で、HSJ に書類を提出します。その後、オーガナイザー養成研修に申し込みます。この研修は、年数回、2泊3日(コロナ禍中はオンラインにて4日)でHSJ が主催しています。訪問マネジメントや養成講座の企画運営方法など、地域で活動始めるためのノウハウを学びます。マニュアルや各種ツールなども提供されます。(HSJ の団体会員として登録ください。)

4 ホームビジター養成講座の開催・利用周知の開始

37時間15コマの講座を開催し、ホームビジターを募集・養成します。ホームビジター誕生後に、いよいよ訪問活動がスタートします。(講座ではHSJ から講師を派遣することも可能です。)

5 活動の点検と改善

5家庭の訪問が終了した時点で、活動をふり返って自己点検を行います。全国研修やエリア別研修など、各種スキルアップ研修の機会を活用ください。定期的なスキーム・サポートの機会もあります。

■ 地域の運営団体(非営利民間組織)例

子育てひろば・支援センター運営団体
ファミリーサポート運営団体
児童養護施設運営団体
こども園・保育園運営団体
産後ケア運営団体
こども食堂運営団体
社会福祉協議会 等

■ 活動の予算と財源について

ホームスタートの活動に必要な予算は、①ホームビジター養成講座費用、②訪問交通費、③オーガナイザー人件費が主なものです。多くの地域では、子育て支援拠点加算事業、利用者支援事業、産前産後サポート事業、養育支援訪問事業として、自治体の委託を受けています。最初の実績作りの時期に助成金を活用する例も多くあります。

世界 22ヶ国と全国 110 地域のネットワーク

ホームスタートは、1973年にイギリス・レスターで始まりました。当時、子育て支援施設でボランティアをしていたマーガレット・ハリソンさんが、子連れで訪れる母親とよく話をするうちに、「もっと話がしたいわ。うちに来ない？」と誘われたのがきっかけでした。たくさんの母親が、愚痴をこぼせる人や傍にいて状況を理解してくれる人を求めています。「当事者性」と「素人性」を活かしたフレンドリーな訪問支援は、やがてイギリス中に広がり、海を越え、22の国（右上）に広がりました。

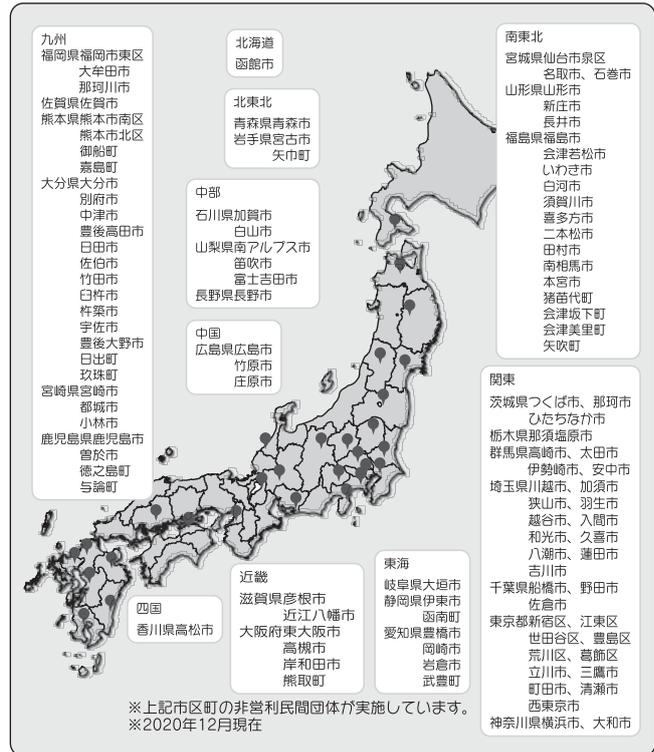
日本では、2009年に正式に始まり、現在、29都道府県 110地域で取り組まれています。全国ネットワークの他に、エリア協議会や都県単位の協議会など、お互いに学び合える環境を作っています。今年度、訪問実績の管理とヒヤリハット事例等の情報共有のために、ITプラットフォームを新たに開発しました。今後も、ネットワークの強みを活かして、全国の仲間と共によりよい支援を届けてゆきます。

(HS 実践事例データベース)



ホームスタート・ワールドワイド

イギリス・アイルランド・フランス・オランダ・ベルギー
デンマーク・ノルウェー・ギリシャ・マルタ・ハンガリー
チェコ・ポーランド・ルーマニア・ウガンダ・ザンビア
タンザニア・ブルンジ・南アフリカ・カナダ・スリランカ・
オーストラリア・日本



～すべての子どもに幸せなスタートを～ ホームスタートが目指す子育てを支え合うまちづくり

ホームスタート・ジャパン 代表理事 森田圭子

コロナ危機に見舞われたこの一年、親と子どもの暮らしはどのようなだったでしょうか。長期の休園休校、不要不急の外出控え、ソーシャルディスタンス、マスク着用などの制約の多い生活、経済的困窮も多く耳にしました。成長発達は大丈夫だろうか、この先どうなるのだろうか、子育てから生活のことまで、先の見えない不安を抱える悩み多き一年でした。

ホームスタートは子育てする誰もが使える支援です。地域の中に家族を訪問し気にかけてくれる人ができ、困難な課題ならば専門的な支援につなげる仕組みを持っています。ボランティアなささえあいの関係を地域に創出し、子育てしやすい地域を目指す、地域住民主体のまちづくりの活動でもあります。今回のコロナ禍はそのホームスタートの価値を再発見する機会にもなりました。

今回の事業では、特に今の時期、支援の隙間におかれがちな多胎育児家庭、外国人家庭、学齢児家庭についてより理解し支援する方法を見出すことができました。現場で良く出会う家庭です。この事業成果を今後の活動に生かしていきたいと思います。専門職をはじめとする関係者の皆様、東京都福祉保健財団の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



ホームスタートのスピリットは
フレンドリーで
協力的で
思いやりがあり
人を信じ
人を敬い
批判的ではなく
やさしく寄り添うことです



Home-Start Japan

発行：特定非営利活動法人ホームスタート・ジャパン

〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-10-1-B 棟 2F

TEL：03-5287-5771 メール：info@homestartjapan.org



ホームページ



体験動画

支援拡充プログラム開発事業 委員会・チーム（敬称略）

多胎家庭支援プログラム開発委員会：田中輝子・西郷泰之・山田幸恵（HSJ）、磯野未夏・笹尾正乃（HS こうとう）、牧野靖子（HS ピッコロ）

布施晴美・佐藤喜美子・糸井川誠子（（一社）日本多胎支援協会）

外国人支援プログラム開発委員会：西郷泰之・山田幸恵（HSJ）、宮越裕子（HS 二葉）、荒砥悦子（HS わくわく）、近江幸子（HS わこう）、石河久美子（日本福祉大学）

福田久美子（（公財）かながわ国際交流財団）、小林普子（（特非）みんなのおうち）、佐藤和央（新宿区牛込保健センター）

学齡児家庭支援プログラム開発委員会：西郷泰之・山田幸恵（HSJ）、小俣みどり（HS ピッコロ）、平本理恵（HS いずみ）、森田圭子（HS わこう）

土屋佳子（日本社会事業大学）、坂田 篤（清瀬市教育長）、北平宣之（清瀬市子ども家庭支援センター）

ニーズ・支援効果情報収集システム開発チーム：渡里祐子（HSJ）、荒砥悦子（HS わくわく）、野口比呂美（HS やまがた）、前島朋子（HS つくば）

近江幸子（HS わこう）、長田真理子（HS まんま）、勝又裕司（HS ゆう）、野口洋子（HS さが）

実践事例等データベース開発チーム：渡里祐子・森田圭子・田中輝子（HSJ）、吉田朋子（HS 西東京）、芦澤早苗（HS ゆうゆうゆう）、野田敦史（高崎健康福祉大学 / HSJ）

HSJ 事務局：山田幸恵、小原淳子、鈴木三千代、西本麻子

発行日：2021年3月30日

乳幼児家庭のニーズ1位は**67%**で「孤立感の解消」、**98%**の家庭で効果

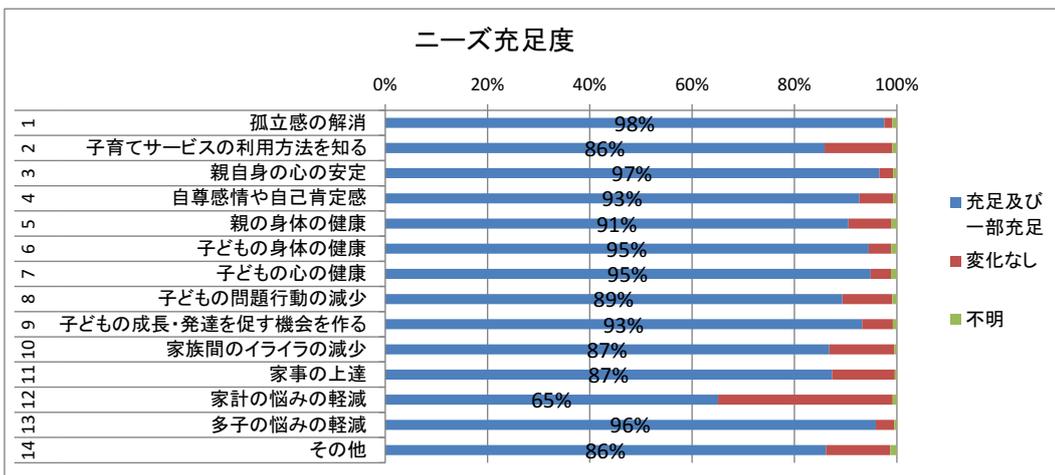
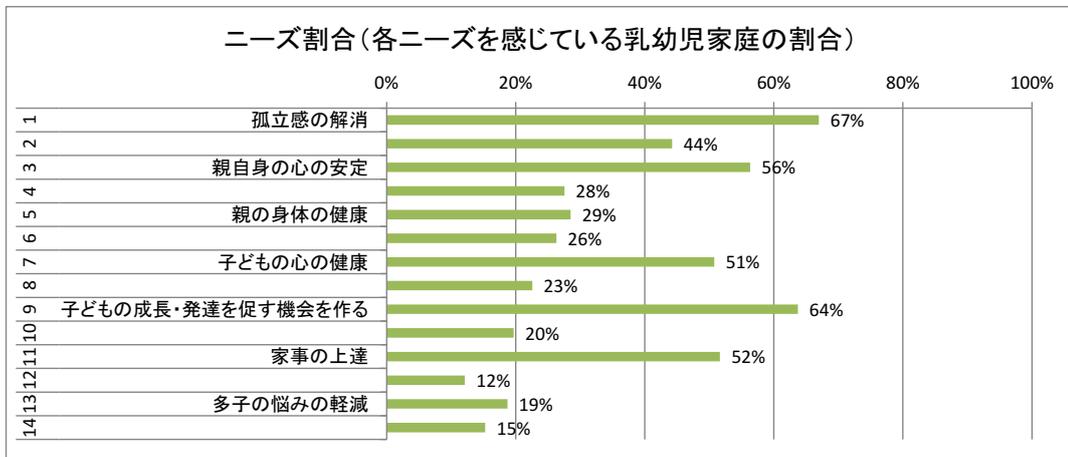
ここで示している数字は、全国で活動するHSスキーム（地域組織）から活動報告を収集し、2019年10月～2020年9月の1年間の全国の活動実績として集計したものです。

ホームスタートでは、利用家庭のニーズを14項目に分類しており、下のグラフは乳幼児を持つ家庭のニーズと効果を表しています。ニーズの第1位は「孤立感の解消」で、全利用家庭の67%にのぼり、集計を始めてから常にトップです。2位は「子どもの成長や発達を促す機会を作る」で、64%の家庭がニーズとして挙げています。3位は56%で「親自身の心の安定」です。親が自身の孤立感や不安を抱えながらも、子どもの健やかな成長や発達に力を尽くしたい気持ちがうかがえます。

これらのニーズに対して、ホームスタートの訪問が終了した後の効果を表すのがニーズ充足度です。「孤立感の解消」については98%の家庭が充足あるいは一部充足したと回答しています。14項目すべてのニーズに対する平均ニーズ充足度は92%にのぼり、約9割の家庭で悩みが軽減されています。

ニーズ数 5,255 対象スキーム 94
平均ニーズ充足度 92% 利用家庭数 1,042

ニーズID	ニーズ項目	ニーズ数	ニーズ割合	充足及び一部充足	変化なし	不明	充足度(%)
1	孤立感の解消	698	67%	681	11	6	98%
2	子育てサービスの利用方法を知る	461	44%	396	61	4	86%
3	親自身の心の安定	587	56%	567	16	4	97%
4	自尊感情や自己肯定感	287	28%	266	19	2	93%
5	親の身体の健康	297	29%	269	25	3	91%
6	子どもの身体の健康	274	26%	259	12	3	95%
7	子どもの心の健康	529	51%	502	21	6	95%
8	子どもの問題行動の減少	235	23%	210	23	2	89%
9	子どもの成長・発達を促す機会を作る	664	64%	619	40	5	93%
10	家族間のイライラの減少	205	20%	178	26	1	87%
11	家事の上達	538	52%	470	66	2	87%
12	家計の悩みの軽減	126	12%	82	43	1	65%
13	多子の悩みの軽減	195	19%	187	7	1	96%
14	その他	159	15%	137	20	2	86%
	合計	5,255		4,823	390	42	92%
	1家庭当たりの平均ニーズ数	5.0					



産前家庭のニーズ1位は「親の身体の健康」、約98%の家庭で効果

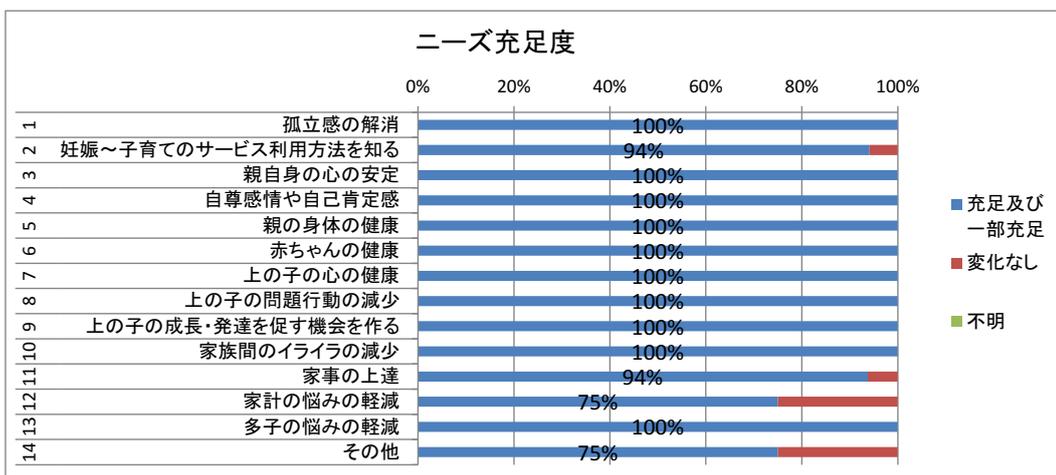
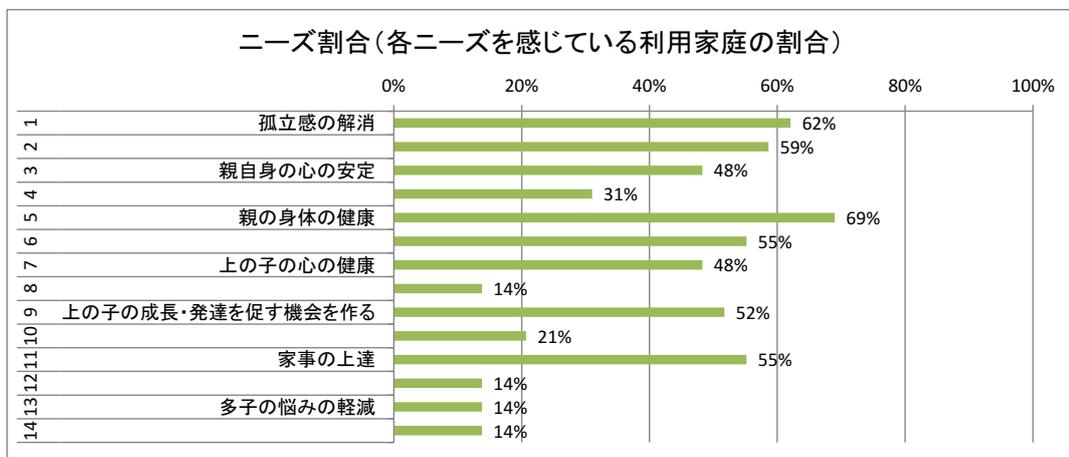
ホームスタートでは、産前家庭に対しても、2015年度から試行訪問を始め、2016年度にはモデル事業を実施、2017年度からは本格的に訪問支援を開始しました。下のグラフは2019年10月～2020年9月の1年間の産前家庭（初産婦・経産婦を含む）のニーズと効果を表しています。ニーズの第1位は「親の身体の健康」で69%にのぼり、次に、「孤立感の解消」が62%で続きます。「妊娠～子育てのサービス利用方法を知る」「赤ちゃんの健康」も高いニーズを示しています。親が妊娠期の不安を抱えながら、赤ちゃんの健康に心を砕いている様子がうかがえます。

ニーズ充足度については、平均充足度が98%と高くなっています。2年前の平均充足度は88%であったとことと比べると、乳幼児家庭と同様に充足度が高まっていると考えられます。

産前家庭への支援は、出産により途中で終了を余儀なくされることも多いため、対象となる家庭数が少なく、さらに時間をかけて効果を分析していく必要があると考えます。

ニーズ数	161	対象スキーム	70
平均ニーズ充足度	98%	利用家庭数	29

ニーズID	ニーズ項目	ニーズ数	ニーズ割合	充足及び一部充足	変化なし	不明	充足度(%)
1	孤立感の解消	18	62%	18	0	0	100%
2	妊娠～子育てのサービス利用方法を知る	17	59%	16	1	0	94%
3	親自身の心の安定	14	48%	14	0	0	100%
4	自尊感情や自己肯定感	9	31%	9	0	0	100%
5	親の身体の健康	20	69%	20	0	0	100%
6	赤ちゃんの健康	16	55%	16	0	0	100%
7	上の子の心の健康	14	48%	14	0	0	100%
8	上の子の問題行動の減少	4	14%	4	0	0	100%
9	上の子の成長・発達を促す機会を作る	15	52%	15	0	0	100%
10	家族間のイライラの減少	6	21%	6	0	0	100%
11	家事の上達	16	55%	15	1	0	94%
12	家計の悩みの軽減	4	14%	3	1	0	75%
13	多子の悩みの軽減	4	14%	4	0	0	100%
14	その他	4	14%	3	1	0	75%
	合計	161		157	4	0	98%
	1家庭当たりの平均ニーズ数	5.6					



利用者の半数が初めての子育て。ホームビジターの8割は40代以降の子育ての先輩たち

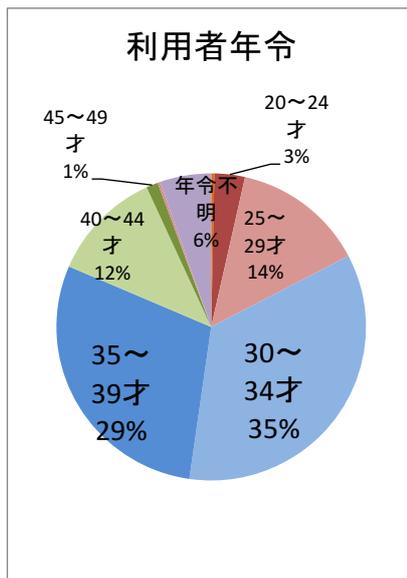
ホームスタートの利用者は6割以上が30代で、1才未満の子どもを持つ家庭は全体の63%にのびります。さらに、半数近くが子ども1人の家庭であることから、乳幼児を持つ家庭とリわけ初めての子育ての場合には、親がさまざまな悩みやストレスを抱えて支援を望んでいることがわかります。一方、ホームビジターは40代以降が8割を超えています。子育てを終了し後輩ママたちを応援したいと活動を始めた方が多いと思われます。利用者とホームビジターが親子のように年齢が異なる場合でも、友人として良い関係を築いている例が多く、そのことがニーズの充足につながっていると考えられます。

対象スキーム：94

利用者年齢

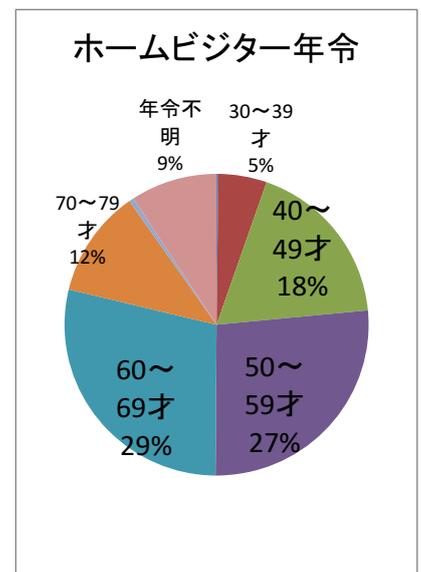
年齢	利用者数
15～19才	7
20～24才	68
25～29才	295
30～34才	745
35～39才	622
40～44才	250
45～49才	26
50～54才	6
55～59才	0
60～64才	0
年齢不明	114
合計	2,133

※)申込時の年齢



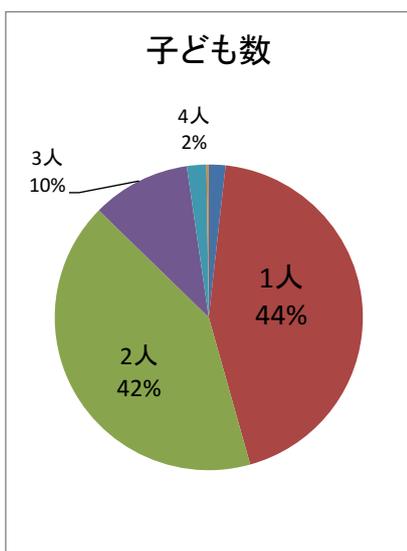
ホームビジター年齢

年齢	ホームビジター数
20～29才	5
30～39才	142
40～49才	501
50～59才	734
60～69才	790
70～79才	318
80～89才	14
年齢不明	254
合計	2,758



子ども数

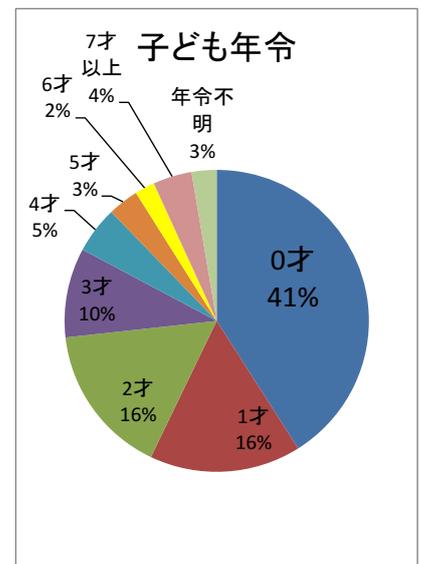
子ども数	利用家庭数
0人	37
1人	937
2人	889
3人	221
4人	44
5人	5
6人	0
不明	0
合計	2,133



子ども年齢

年齢	子ども数
0才	1,468
1才	576
2才	577
3才	343
4才	179
5才	117
6才	76
7才以上	148
年齢不明	95
合計	3,579

※)申込時の年齢



※ 1才未満の子どものいる家庭の割合：63%

利用家庭はどうやってホームスタートを知る？ 36%は保健師等から 19%は子育て支援サービス等から

ホームスタートを利用するには、必ず申込みが必要です。グラフの「申込ルート（紹介）」の「本人」以外は、紹介者が本人承諾のうえ、申し込んで利用を開始した場合を表しています。グラフの「情報入手先（本人申込の場合）」は、「申込ルート（紹介）」で本人が直接申し込んだ場合に、どこからホームスタートの情報を得たか、を表しています。この2つを統合して、どこからホームスタートの情報を得て利用に至ったかを示しているのが、「情報入手先（本人申込、紹介を含む）」のグラフです。

本人申込を含めて保健師等から情報を得て利用された方は全体の36%にのぼり、徐々に多くなってきています。また、約2割の方が、子育てひろばや保育園など地域の子育て支援サービスを通じて利用されており、ホームスタートのような家庭訪問支援は、紹介や情報提供してくれる他機関との連携が大変重要であることがわかります。

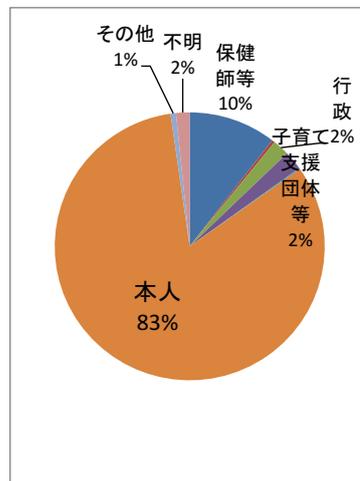
また、「情報入手方法（本人申込の場合）」は、どうやってホームスタートの情報を得たか、を表しています。人から聞いた、つまり口コミで情報を得た場合が6割を超え、上記の結果と併せると、信頼できる人や機関から直接聞いた情報が、利用に大きく結びつくと考えられます。

さらに、2回以上利用する家庭が6%にのぼっており、妊娠期での利用から産後の利用につながったり、1人目の出産後に利用した方が2人目の出産に際しても利用するなど、切れ目ない支援という効果も表れています。関係機関との信頼関係を築き、多くの人にホームスタートの安心安全な支援の機会を提供できるよう、これからも努めていきます。

対象スキーム：94

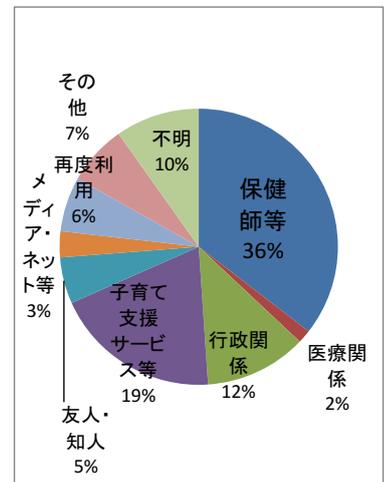
申込ルート(紹介)

申込ルート	利用家庭数
保健師等	148
医療関係	5
行政	28
子育て支援団体等	32
保育園・幼稚園	2
本人	1,167
その他	9
不明	23
合計	1,414



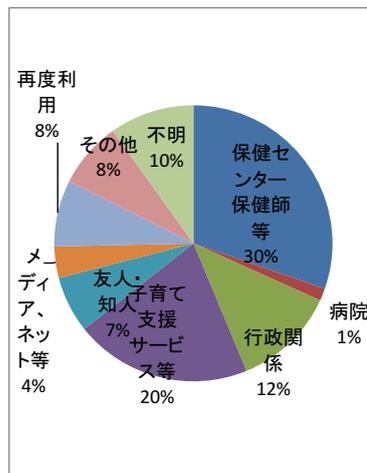
情報入手先(本人申込、紹介を含む)

情報入手先	利用家庭数
保健師等	502
医療関係	22
行政関係	168
子育て支援サービス等	274
友人・知人	77
メディア・ネット等	43
再度利用	91
その他	99
不明	138
合計	1,414



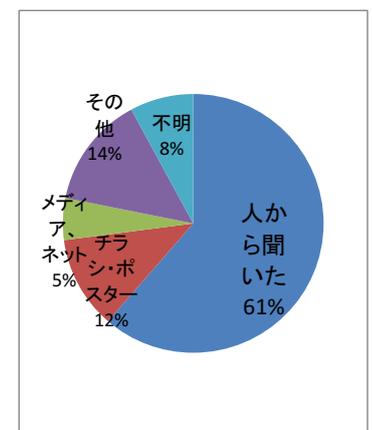
情報入手先(本人申込の場合)

情報入手先	利用家庭数
保健センター保健師等	354
病院	17
行政関係	140
子育て支援サービス等	240
友人・知人	77
メディア、ネット等	43
再度利用	91
その他	90
不明	115
合計	1,167



情報入手方法(本人申込の場合)

情報入手方法	利用家庭数
人から聞いた	716
チラシ・ポスター	135
メディア、ネット	61
その他	163
不明	92
合計	1,167



累計 10,000家庭 72,000回訪問、ホームビジター2,700名 の実績

現在、登録スキーム数は105、利用家庭は累計で約10,000家庭を超えました。訪問回数は累計72,000回に上っています。2018年度まで、利用家庭は年間およそ200～300家庭増加し、訪問回数は年間1,000～2,000回増加してきました。しかし、2020年1月末から新型コロナウイルスが急速に拡大し、地域によっては訪問活動の中止・延期が避けられなくなりました。各地のスキームではさまざまな工夫や取り組みを試行錯誤で進め、2020年夏ごろからは次第に利用が増え始めています。これからも、利用家庭やホームビジター・オーガナイザーの安全を第一に、今後も全国の子育て・産前家庭のために、活動を進めていきます。
訪問して利用家庭を支えるHSホームビジター数は、およそ2,700名になりました。全国のホームスタート活動をボランティアで支えてくださっています。

※HSホームビジター： 家庭を訪問するボランティア

※HSスキーム： 各地域でホームスタート活動を実践する地域組織

利用家庭数・訪問回数

項目	2008/4/1～ 2020/9/30	内訳	
		乳幼児	産前
利用家庭数	10,220	9,887	333
子ども数	16,917	16,593	324
訪問回数	72,742	70,940	1,802

のべ訪問回数

82,842

項目	2020/9/30 現在
HSホームビジター数	2734
HSスキーム数	105

年推移

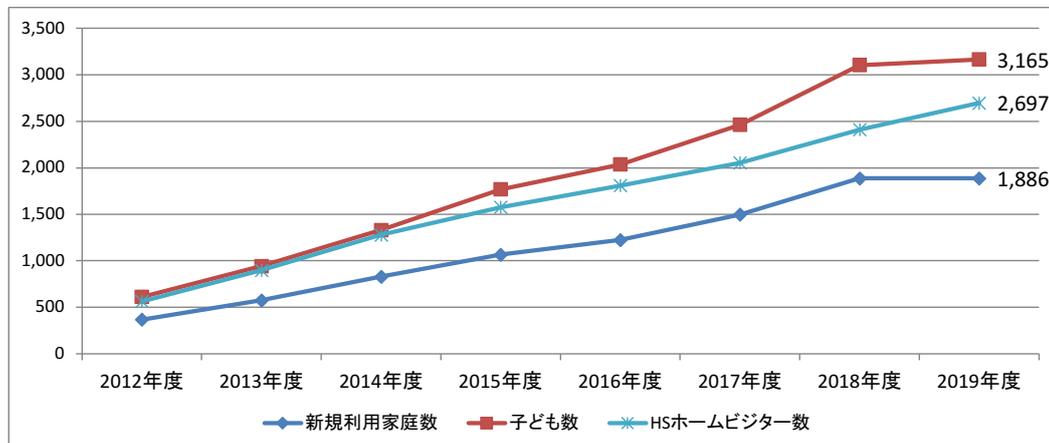
	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2008/4/1～ 2020/9/30
新規利用家庭数	367	573	829	1,065	1,223	1,499	1,886	1,886	10,220
(上記の内、産前利用家庭数)	0	0	0	5	35	85	96	87	333
子ども数	611	941	1,329	1,769	2,036	2,462	3,106	3,165	16,917
訪問回数	2,489	3,960	5,892	7,570	8,494	10,957	13,503	13,864	72,742
のべ訪問回数	2,797	4,501	6,670	8,590	9,685	12,470	15,522	15,871	82,842
HSホームビジター数	563	898	1,279	1,578	1,811	2,054	2,410	2,697	3,010
活動スキーム数	38	49	66	76	78	86	94	93	

※2020/9/30現在の登録スキーム数：105

※訪問回数： 利用者が訪問を受けた回数

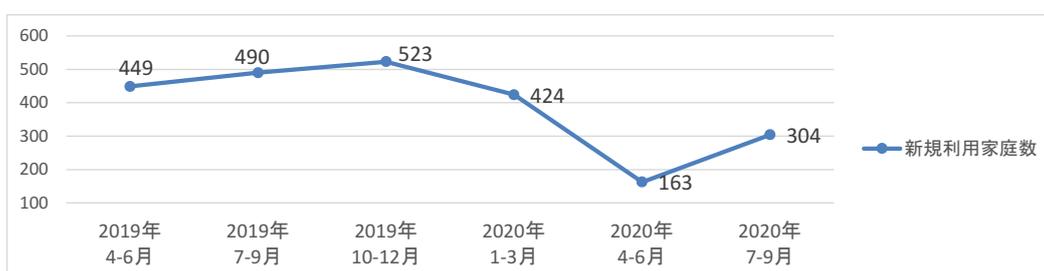
※のべ訪問回数： オーガナイザーとホームビジターの、のべ訪問人数

※活動スキーム数： 利用が開始しているスキームの数(最初の利用家庭の初回訪問日を開始と考える)



2019年度からの利用家庭数の推移(新型コロナによる影響)

	2019年 4-6月	2019年 7-9月	2019年 10-12月	2020年 1-3月	2020年 4-6月	2020年 7-9月
新規利用家庭数	449	490	523	424	163	304



ホームスタートの効果 利用者の心理的な変化に着目して

高崎健康福祉大学 野田 敦史（00712）

立正大学 野澤 義隆（00661）

[キーワード] 家庭訪問型子育て支援、ホームスタート、心理的健康度

1. 研究目的

訪問型子育て支援は、子ども家庭福祉領域における世界的な潮流となっている。とりわけ、ホームスタートは、世界的に実施されている訪問型子育て支援の1つである。ホームスタートは、これまでその効果が経験的に示唆されているものの、実証的な研究はおこなわれていない。そこで、本研究は、ホームスタートの支援内容が、利用者の心的要因にどのような影響を与えているのかを時系列的かつ縦断的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査実施時期と調査対象

本調査は、2014年4月から2014年12月にかけて実施。調査対象者は、ホームスタート・スキー21か所計510件に質問紙を配布し、回収数は73件、回収率は14.3%であった。

(2) 測定時期と調査内容

オーガナイザー初回訪問時：

a) 訪問中の所要時間, b) 訪問時の限度回数
の説明の有無, c) PSYCHOLOGICAL WELL BEING SCALE (以下、「PWB」)
など

ホームビジター訪問時：

a) 訪問時間, b) PWB, c) 傾聴と協働に関する質問項
d) Client Satisfaction Questionnaire (以下、「CSQ」)

オーガナイザー最終訪問時：

a) 訪問中の所要時間 b) PWB 18項目

4. 結果および考察

(1) ホームスタート利用者像

調査回答者の基本属性の比率の高い項目に着目した結果のホームスタート利用者像は、「2才未満の子どもを持つ核家族の30代の母

親で、専業主婦の利用者」であることが予測できた。これらの利用者像に対するホームスタートによる効果は、「協働」と「傾聴」の活動が訪問回毎に積み重ねられ、その活動によって利用者の「満足度」にも影響をもたらしていたことが示唆された。

(2) 協働と傾聴が与える効果

本調査結果は、「訪問型支援活動尺度」得点、すなわち「傾聴」と「協働」が、「CSQ」得点、すなわち「満足度」に影響をもたらす結果であった。さらに相関係数からは、「CSQ」と「PWB」の間に有意な正の相関があることが認められた。このことから、「協働」と「傾聴」は、利用者の「CSQ」すなわち満足度に影響をもたらし、その「満足度」が、利用者の内面で自身の「見守られている」「認められている」等といった安心感や自尊心が自覚でき、その後、時間を費やして「PWB」が向上していくことが推測された。

(3) ホームスタートの活動方法に対する可能性と今後の研究の必要性

ホームスタート活動の方法として中核を成す「協働」と「傾聴」は、利用者の「満足度」を上昇させるキー・ファクターとして効果を発揮していることが推察できたが、この満足度は利用者ビジターとの関係性構築による安心感からなのか、あるいは利用者自身の生活・育児スキル習得などの自己効力感や肯定感から影響しているのか、そして、満足度が高い利用者がどの程度次の子育て支援サービス資源へ主体的に参加できるようになっているのか、今後より詳細な検討が必要である。